

努力が生み出した栄光の歴史

苦境を越えて世界へと躍進 スポーツ界の先駆者たち

己の肉体と精神、そしてたゆみない努力によって、スポーツ界に歴史を刻んだ専修大学生たち。現役時代はもとより、指導者として今もなおスポーツ界を牽引し続ける卒業生一〇人が「努力すること」「諦めないこと」の大切さを語る。

スポーツに限らず、 人生のチャンピオンを目指してほしい

こう見えても最初は、「はたして四年間やっていけるのか」。そんな緊張感と心細い気持ちで、金沢から夜行列車で上京したものです（笑）。幸い、レスリング部、体育寮の仲間、そしていい先生方と出会えたことで、とても楽しく、有意義な四年間を過ごすことができました。

専大へは、大きく二つの目標を持って入学しました。一つはレスリングで結果を出すこと。もう一つは教員免許を取ることです。ですから、レスリングの練習はもちろん、授業も欠かさず出席していました。レスリング部では、四年のときに主将を務め、全日本学生選

手権で優勝。さらに、全日本選手権制覇という結果を残すことができました。練習の厳しさ、努力が報われることを体現したことは、私のその後の人生にも大いにプラスになりましたね。

ベッドに小さなテーブルを置いて毎晩勉強した

「学業とレスリングの両立は、大変だったでしょう」と言われることが多いのですが、私としては特に辛かった記憶はありません。

朝は六時に起き、六時四十五分からの「NHKラジオ講座」で英会話勉強。その後、朝練があり、九時から授業に出席。通

常は午後四時まで授業で、その後は夜七時までレスリングの練習です。ただ、教職の場合は授業が六時までのときもあり、練習に参加できない日は、ウェイトやランニングなど自主トレを行なっていました。

ほかに、空いた時間は図書館にこもって調べものや論文の執筆、寮に戻ってからベッドの上で勉強していましたね。

当時の寮は、八畳間に二段ベッドが三つ並ぶ六人部屋。ベッドの足元に棚を取り付けて、そこに教科書や本を並べ、折りたたみ式の小さなテーブルと卓上ライトを置いて深夜一二時近くまで勉強していました。

授業で印象的だったのは、古典文学の中田武司先生のゼミ。毎月二〇枚の論文があり、とて

も厳しいものでした。自らテーマを決め、図書館で調べて論文を書いて発表し、中田先生から評価をいただく。

非常に緊張感があり、知識や教養のみならず、自ら学ぶ姿勢を身につけることができました。

現在、専大レスリング部の監督をしています。が、レスリングだけでなく、人生のチャンピオンにならなさい」と話しています。社会知性を身につけ、大学で得られるものはなんでも、奪い取るつもりで積極的に学んでほしいですね。



衆議院議員 馳 浩

(1984年文学部卒業)
富山県出身。専大ではレスリング部の主将を務め、在学中に、全日本学生選手権、全日本選手権で優勝。その傍らで、教員免許を取得。84年、母校でもある石川県星稜高校で国語科教員として教壇に立つ。同年、ロス五輪レスリング・グレコローマン90kg級に出場し、翌85年、プロレスラーに転身。95年、参議院議員選挙で初当選。00年より衆議院議員となり現在4期目。専大レスリング部の監督も務める。

目標は遠く、高く、大きく。
そして絶対に諦めない

プロゴルファー 羽川 豊

(1980年商学部卒業)
栃木県出身。ゴルフ部に所属し、朝日杯争奪全日本学生選手権で4年連続優勝。卒業後、81年に日本オープン、日本シリーズ共に優勝。08年シニアデビューを果たし、現在はゴルフ解説でも活躍。



実

家がゴルフ練習場だったこともあり、高校の頃はひたすらボールを打ち続けていました。全日本ジュニアで四位に賞し、大学進学の際には、全日本優勝などからの勧誘もありました。しかし、専大の岡村誠男部長の熱意ある勧誘と、「初めから強いところでやるより強者に挑戦する立場で自分を伸ばしたい」という気持ちから専大入学を決めました。

そのときからすでに、目標を学生大会での優勝だけに置かず、さらにその先の「プロになる」ことを意識していました。結果的に、その気持ちが学生選手権での四年連続優勝に結び付いたように思います。もちろん、それを支えたのは、大学時代のハードな練習や、礼儀作法など先輩方の厳しい指導です。「何でもなんことまで……」と思うこともありましたが、その経験があったからこそタフな精神・体力が身についたと思います。

日本卓球協会 名誉副会長 栗本キミ代

(1961年商経学部卒業)
香川県出身。在学中に、全日本学生選手権大会で3年連続のチャンピオンとなり、59年の世界選手権では、シングルス、団体共に世界チャンピオンに輝く。97年、国際卓球連盟殿堂入り。



スポーツに
懸けた
学生時代の
努力がその後の
人生につながる
—諦めない気持ちを
育む

卓球で自分の可能性の限界に挑戦する。世界一を目指し、不断の努力精進を重ね、卓球一筋の厳しくも楽しい学生生活を過ごしました。「試合のときの修羅場を思えば、人生におけるどんな困難にも耐えられる」。選手時代に感じたこの思いは、人生の大きな礎になりました。

県立岐阜商業高校 硬式野球部監督 藤田明宏

(1990年経済学部卒業)
岐阜県出身。準硬式野球部で主将を務める。卒業後、県立東濃実業高校にて指導術を学び、県立岐阜城北高校を選抜高校野球でベスト4に導く。09年、県立岐阜商業高校に着任。



常葉学園菊川高校 野球部長 佐野 心

(1990年商学部卒業)
広島県出身。在学中、野球部の主将を務める。東都大学1部リーグに通算64試合出場、ベストナイン3回。卒業後、92年中日ドラゴンズに入団。04年、常葉学園菊川高校野球部長に就任。



在学中の望月教治監督との出会いが、今の自分を支えています。監督は、アイコンタクトで選手の意図を理解し、大事な局面でも、選手の判断に任せてくれることも多い方でした。勝敗だけでなく、選手を主体に個人能力を高めていく。私もそんな指導者を目指していきます。

将来への明確な目標を持ち
必死に試行錯誤するなかで
自らの答えを出す

富士急行スケート部監督 黒岩 彰

(1984年商学部卒業)
群馬県出身。大学4年のとき、サラエボ冬季五輪出場。88年のカルガリー冬季五輪では銅メダル獲得。専大スピードスケート部監督、プロ野球チームの西武ライオンズ球団代表などを経て、現職。



「世

界のトップになる」。専大スピードスケート部の前嶋孝監督（現・部長）に、最初に宣言した言葉です。そこから試行錯誤の連続でした。四年後のサラエボ冬季五輪に照準を合わせ、何をすべきかを前嶋監督と徹底的に話し合いました。当時はまだ、日本は世界での実績がなく、練習方法も欧米のやり方をまねただけのもの。「これでは、欧米に追いつくことはできても、追い抜くことはできない」と考え、独自の練習法を考案しました。夏場にスケートティング感覚を

養うようローラースケートを取り入れたり、体のバランス感覚を磨くようにサッカーのリフティングもしました。このような練習方法は、当時としては革新的なものばかりでした。ただ、周囲からの反発が大きかったのも事実。一年のとき、全日本選手権で優勝したのに、アジア選手権の代表から漏れ、悔しい思いをしました。トップを走るのは、周囲からの反発は付きものでし、失敗も免れませんが。逆境や失敗を恐れず、努力し続けること。その大切さを学んだ四年間でした。

アイシンAW レスリング部監督 吉田栄勝

(1975年経済学部卒業)
青森県出身。73年、レスリング全日本選手権フリー57kg級のチャンピオンとなり、世界選手権にも出場。娘の吉田沙保里選手（北京五輪金メダリスト）を自ら指導。09年4月より、現職。



「練習量に結果はついてくる、だから誰よりも努力を重ねなければいけない」と強く感じ、早朝から夜まで、道場にこもってひたすら練習を重ねました。その結果、全日本選手権で優勝することができました。今も、選手を育てるうえで、その気持ちを持ち続けて指導をしています。

北海道議会議員 堀井 学

(1994年商学部卒業)
北海道出身。スピードスケート部に所属。リレハンメル冬季五輪500mで銅メダルを獲得。卒業後、ワールドカップ500m総合優勝、1000mで世界記録樹立。07年北海道議会議員に当選。



黒岩彰監督の「一緒に世界を目指さないか」という一言が専大入学のきっかけでした。在学中は、スポーツの道を志す素晴らしい仲間たちと一緒に成長し、世界で勝つために、できることはなんでも取り組みました。自分を信じ、諦めずに夢に挑戦することを専大で学びました。

三信電気常務取締役 加藤喜代美

(1971年文学部卒業)
北海道出身。レスリング全日本選手権で68～72年に5連覇。ミュンヘン五輪フリー52kg級で金メダル獲得。卒業時に総長賞を授与される。妻は専大卓球部出身で71年世界選手権2位。



朝6時起床、14～17時半が公式練習で、合間に学部と教職の授業に出席。夕食後は道場でタックルや綱昇りといった自主トレをしましたから、遊びはいっさいなしでした。専大で培った文武両道、有言実行の生き方は今も私の支えで、現在のようにな不況になるほど燃えます（笑）。

ヤマハ発動機スポーツ振興財団 スポーツ振興支援事業グループ リーダー 村田 互

(1990年文学部卒業)
福岡県出身。ラグビー部に所属し、89年関東大学リーグ戦優勝。卒業後、東芝に入社。日本代表にも選ばれた。99年、日本人初のフランスプロリーグ入り。08年、7人制日本代表監督就任。



合宿所生活でラグビー漬けの毎日のなか、授業、卒論にも追われ、体力・精神力共にフル回転の学生時代でした。さまざまなことを一度にこなす経験が、「どんな状況でも冷静にすべきことを見極める」という習慣につながり、現在、監督として選手を育てる際に役立っています。